



平家物語巻第十一 目錄

九条大夫判官のんさん八事

志よとやとまんをいのる事

あつた平家信いさうのいあまのつわりの事

九条にりふ判官まんいあまのやうらやうのる事

ちりのい源氏くくをりくく事

あつたとたのられ事

平家と海人のたのまとうとやまのくく事

全し海のいあまのる事

あまのよ一あまの事

田内とありのんねりあつた事

さうくまんやうらりく事



ちんのうらうらつせんれり
せんていをはりのわりの免川しうの事
まゑれうくしはもとの事
おつー雨沛と油うくさうひおぼうちんの事
女院出がれり
おのつとれくわの悉ぶられの事
おのいこのやーらうきれおのくおがらうと
たさけくろ

平家物語巻第十一
九条大夫判らんゆんらんれ
元暦二年正月十日九条大夫判友のつひのぬん
れ沛志より一乗りて大蔵つやとつひのあうんと
りて中さまけるをぬいしをたゆくうびはふて祿
的りももれれをり悉くもすせられあうきを部
外よりつくとたものう人ふくくうみ押う人とな
進りちうれとてぬ三り年一りる悉くせめ押とらと
してれやくの國とぬさけぬれしいららおし
せんしし今夜よりつひよをりてしまりの
らふてんちくちんらんまても平家れあうんり
ことせむおしやうとてPされりるは院のた

平家物語巻第十一
九条大夫判らんゆんらんれ
元暦二年正月十日九条大夫判友のつひのぬん
れ沛志より一乗りて大蔵つやとつひのあうんと
りて中さまけるをぬいしをたゆくうびはふて祿
的りももれれをり悉くもすせられあうきを部
外よりつくとたものう人ふくくうみ押う人とな
進りちうれとてぬ三り年一りる悉くせめ押とらと
してれやくの國とぬさけぬれしいららおし
せんしし今夜よりつひよをりてしまりの
らふてんちくちんらんまても平家れあうんり
ことせむおしやうとてPされりるは院のた

よと出國しめさやうひせおひつひてのぬひたる
しりつてのきりつてくくやれく清代友とてちよ
くきんと遊聖まおほいたうのためさう西國を
るるひりぬされしくりもこまのひりつれまよ
び種舟をろりつれくくたんのきりせせんす
るり是をむやくの命をけいふさいしそつさ
さや思ひあらんすらんやあれまよみれうさく
ぬくくられあしとそりまひりまやしぬまきひ
海ゆくこんれあてやまて正月もから二月も
きなりぬまのくさくれてそ然の海やくろき然の
風やんてき又まのまよられまよとくりじつて三
まよもまよくならりしり

まよとまよくまよるぬのり
けりて女二柱よくりんぬいあり是を志んしし
うらんかりとくろ三志ゆれしんまあまゆあ
くまやあふり色し入をあててゆあせいのため
とまよ海聖と
あまお平家信いさうのうまのあつの事
同じ二月十日日原氏見うしものうまたりまよ七
百よそうけひやうきんよとまたりて信のまよん
まよまよせんやうさうまよあつと九条大まれ
判友しつて二面よまよのまよたり東楽川
たよ想まよまよんしるまよもむくわとまよん

ふたつやうぶつやあめの日ほそろくはるぬわめいさ
もつれぢふそくぢりや一か国本とやうつさふ
とあきてぬさあふし母さつしとふとよつすあま
しゆふかきふ母さつしとふとよつすあま
めふえ日やとくふた

九条にりふ判くげんいふさひやうらやりのる
まねりわごぬきまふふふふふふふふふふ
て探今夜ぬなにくさのぬうしといつあふんぐい
ひやうらやうあり中一もつらけくちひるを
よさうろとたふいこくや判及所のあらも何この
そのちほくちひるささるむたさのけんとふふし
うけひひつとねりんやひえゆじてつもめをへと

ふけやき一舟をまほ一やとくつねをともるふ
のらとたてあふふろたたてりるをてるつもとも
るもととあはまり判及つとつあちくいなくされ
かすひ一ひえきひひとやとくくさるたふも
あもひあ一あねしひとさたうらと見えたりなる
ひあはまてさるうりつひとるあまこをさ
せんそりつとよつらつ人のぬねまをさうのさ
まりとりやもつぬきぬれも百らやう子ちやうも
たてよつとつひのぬねまを一ちやうもたつぬの
らすそそねひまひたるのちひるひるそよまふた
ぬこを力とまふり一せしひまをほりほ一ひと
ふつとふへぬいぬまふひくぬとぬらぬと

らぬ紙をりれちくじちやとこうPう人としをてし
ゆりくろりつりしれちくじちやとこうPう人としをてし
さすくさすくさすくさすくさすくさすくさすくさすく
むちりれとのも人しあら原すくしてはくのはつり
ていささささささささささささささささささささ
及ふまじふまじふまじふまじふまじふまじふまじ
れも判皮今をよもせうくぼくろひのちのらん
そ一ちゆものせよやわりのとてつやとおびやう
よて物にくまへこころさるものきて今をとうと
うまさついでとのぬんころをせのPうう
は風ととをちけりくせはらんゆめやまうせら
せつもんをとちりてす判くりんぬんせんぬぬんぬん

おおれ井たがりたのふびりふ幾種の下をそて
きとの建りのいりてうてさよりのなり聖山人末
海月とまゆもきんせりちよころまりをさふ
らしちやのけりてちりいしりせとのぬんをぬ
てめふ甲りけささう三層ひやう色けさのふ同志
る中床長湯たりのかいせり三長舌守じさしん
弁交い下れつものそののまかしてふまもあ湯らやう
りてそそさてその建らと一らやうぬねをりて
まうりさのりれささすいしあうんとててひのひ
これちあささう夫へりあならしてちかんとおるし
桐はよくちをささうとぬやとて二面よさうの
ぬねの中へちさうりそりてさささささささささ

もねりゆい少のて馬やもうみを抄ひれ海一ひふ
は巻くをよきてく、はめひくはほいあり志
りしひさしくとうりねりくくつ色ひきてをめ
つくりけられちりヌきうのぬねお馬ヌ十ひまた
てられたりひいみおヌ十さほりありりりり是
とくくつぬけいとも思ひけん二らやうひららとこ
とひ死てそのさにくるも呵判友い勢れ三赤う
そり流つていやひけくやうりるそのたとれ
かゆらそのれ中一ふちう流つたそのやあさあ
て素れとのねうしぬきてヌ十さけりひく色た
ねうたさこの中一懸くく一さあゆさきをよきくつり
りすたりりんよしいひ思すうりのすす、男のや一か

まめのもろひさたれとくふと流ぬりせうくつら
せたり、うさるる流を下人一ひのきてをうて系
我判友何そのうやの流つても本國れ值人らんさい
のあんとう六ちりりへ聖中老うていさりこそす
判友のうくはふりへうてとあくをあれやうて
や一まのあびなんちやよく一てゆもあさふあつ
くうそのれくまほ一ぬうすおよあてゆりていこ
ろせいその流ひりさなちあいのとり一とあく
流そのつくとまうやとひのうとらうと中よ
一いつひあといと一さといおまう一のひう
ひせんをまをの流うと書てはとけらうともの
P せうまひかへいよのしととやPや判くつんああ

かへやふのひしういふささきこりきつる義経のふけ
うらふはくろてにさよこをたうししやへはる
せうきつうかくのあふふまこつてやいらんた
ましくはらふきんひうやうふすたま首ふ回國れ
うらむこへびあられんわしのみんなゆきまよ
らやまへてんないささきんおりりへの跡とせめ
ふ三子ふまへつよの國をめぐりて統のひこわへ
の海せうきをささていとやへる
くろくくもたいられる
おろのふしお平家のうらろ夫つつおんものちお
まふせのつてし志きゆうりおんまをささき
すけりしと城と早きのまふる余判友ささきふよと

えんさうていこき神よまつまてさくうけりた
らよよせぬみらくくものしやうと尸をさゆぬ
ふ一本をかりきりかりのこりよる源氏ゆと
けくりてとてよせられをさくくもさんく
くくあひくくさやうのるとりりたりあれもうり
れきてそしむらぬふまをさふ々々ゆせも水の
荒れ子らくらうかよ人の首とらとらあひの空
ふさくくりていくと神とまつられけさ又ちの
ゆをとりてまよとやへるしつのはるるや
のゆえに二日ちとへつをひくまのさくぬさ
ふよきよやとてうのめしおなりてうけは
まんとうまんさいうらむささてあふとさめふら

うひなる大所のふえよりくつてよものさつりくさう
あしたまふくちく我十八日乃まゝこの志くはぬさの
國のちたとのつよきあまやうて馬のつゝをさや
さめのふも井れや志くさるるたりさうれぬくはく
らきさくよせ給ふほく小京のびくよまとね
しめてるのつらうきうあまともせうく志た
なめりらるるやここ三人ゆまつれたり判友是を
つらちちつらつてく趣めそ京よりさや志まふあり
ゆや志まふしつらき趣素我そ部おゆわこつよ女
さうれはつてさまらたひとのをまひは判友さまも
あまの國は下人よてあまのさふほくつてつて
されてまりるほくよいまこぬあしふいやさうと

さこのあしなひ志やせよのつらとの人きつれを
だひくまりのこらこつてよほくよやし海のあん
ぶつてよく志ありてゆと申判友何事しのはひ
よせしあつらんとのな人を下らうをさくはつら
ひはれはけらまきてよりらん何事よとつてつて
志ありんふと申きをそれきさそあつらんをて
あつらもれしやくありてほくつひささやあつら
てさるよてもなふ事しあつらんやとひかへり初
のやうさうんふとくつらつて志よお源氏のれや
ううのひさくはるつらつてれゆすつらつてつて
てあんとのりんしれ大志やう源氏のれつらあ
く一人を三つをれつらのぬ一人を九条判友ぬと

さうお聖さんさうて目とのり判らんともみりた
取りと俄判返しせのちいまたおとあの方あさ
のひりものうーちうもれて志取うまうくゆと
のこそりんくもん役も事うさむてらんや中世
きやこすうややのこもうりきんとれぬひは
例もほうれあましへ志やほとれとてぬみとや
ゆも聖あのおとあさ志りりてあ有こつものた
るのゆのぬ屋うみしうととれねずしぬて大れ
うもりこーらやうらんらとひも入てたまなら松の木
ふ志めつあてそと取られたるもんらんはふと
ゆりつて見ゆずしそけいも女衆のぬみとがが譽
て九条を死すくやとのうてうやうぬなれそりく

取大風大波ともさうひはまうふそあひつさるそ
ゆせのと坊うき敷婦さしゆくゆもすもんも
取へしなとありそ外のるりまこまやうゆそゆ
まもも是みるぬへんて毛ようありつゆは天のゆ
取もふさるぬ見よつうらぬおみ勢りさんと
まゆゆおさあぬのり判返しちりのへとつてや
まのくやうちつりは聖らんひたまるをびりまあさ
まふゆいかりひく時やるれぬとけいもけいの聖い
つすすちさうも志がひくさうりよせよやとてつ
ちけり

平家屋敷力たひ聖とうとやまほろも取くる
此を二月廿八日とらこのあくゆりの事なれそ

あめくろくを平のうす見とやもくしりてらうり
中一と源氏うりびねくよせりる成平をうん
れきし免すやもと大せいとくうみくたれや
あきてんないさきんたりと一に聖とせめはい
よの國をあくたりひるまうその成をうりもら
り人の子らうとり百よ人のふひをとりてや一海
をまうせたりたれと成海やこのく清教をうて志
川けんありそのとせうまうありとてさうしふあ
はりしくみくせうまうおてそおらとちりのや
あさされよきてんそやとPもりてぬふ源氏呵と
とく清らりてと一よせうり大勝をいそあうらん
りうふのあつと成へしせそくうふおしあをう

六百よりこれ毎ともとまをうふとめささけひて
おしおあを志よの清母ねよを女院水の政所二
位は以下れ女らうらめされたり成海いとこの母
志を一あうそおりのゆふ年大納言まか細き新中
納言志也このたつみい下の人ととこのく舟よ
のりてあうひさくのもらと一ちやうけり七八た
びと一しつてみまじらんと百ふらうのりよと
志よじたりまか一しとやみささく見たりまた
まうのあさみらもや大納言とみしりありられ
うしきのひくきよびううれすそあのうらひを
まみまいしよこのとく志めこし母けくされた力
成しよ坊回うらまか一らあの新しりたり

お河ひなすめらとてめとりのちれま存のねてくる
き馬れ母とうたにくまーまにさん婦くつらんれく
とふてそねりちとちるのふみあきけつとらあり
る一ぬん力ほほりひ大丈判安みれりとの義理を
や平家のがくお見まるとんんころをすつやび
つおらんさんとそとふれつとるらまんとそ
ひつおらんお家のいへるあまきとまき大せやう
くんまきまげさうやいやいせやとてさー夫よ
お母とありとほやおりの母もあり又ほくさてま
のれいこーろがらんしちやのふつれはとらさ
うとそゆりこーのあの大爺のあたくしやていよ
ーちりのねりいせの三歳ありそりそそかなのほら

ほくひくかなのれいことうひやうととせりとうこ
うくまん共働きとさよあふーう力りとら三飛ひ
をうとつちれも同回赤ひやうととなくのりぬら
係とのき井乃太爺ひりー爺并安おとそ一人満子
のつともとのせしとくはかなのほてとをさこらお
家れつともをあまきとまきつれりやとまきとまき
てあるひそらねやよいれまもあまきひやら
やひいれぬねとあり係氏のつともとのとまきと事
をせすゆんでおけりてさつくとねとめをみだ
てさつととねらのをきさつとらあめつりよま
めおとてれめささけじてせめたくつよま
ひやうととねとらとあつとらそのよまらひを

しうのいふと減きすまらふいふにみされ入
てくし大ととなつてつし志のさふさやまほ
ぬちのぬさやうひやもよりししのせふしつり
預きうややうひのふし七十八元をよもむゆし
志あれむのやうそのをら減一きし修く正あてと
既やもはかいふんし既まうの正修る物と申しよ
とらこめうこむしやあててく舟一のほそたひこ
とやうせむら事しう口とくたれむとぬをむも
まぬのきりふ上て一いこむこま人むしとぬこ
ま人をぬといしとて志のちうの次赤兵志のけさ
うのこのめら兵志しとらぬ七ひやう点景情と
きんしして又面人小舟とさ小舟のほそやふし

らひとらぬつのおれけりしとらよきてしらん然て
既判友もハチよきやうあよよきてひり過ら平
筑北平しと志けらうの次赤兵志みれやりたさ小
すくみむ大をん志やうとよてうもしくいお小公
れに結ふとくし受つれやも海上らるうお船ちつて
ふれあさやう志のちやうふゆりし午きふの源氏
の大御軍とふれ人よてまうますそ舟のまやふの
びとそPとらいせり三あうしとりのれ事しもと
あうやせい日大置れ清り急りふとらとめれぬと
やてふ九君大支判友ぬうしりつふちさよ日
らひてのぬししくさてそそれそくしあふ人
らあふしりふらんなれさんぬれ平治ふらうり

かいさきしやうあつちのそとてはまことひたき
成や終りすうりまささうめの小禮よくろつやおと
志のよろひとふまといふとのとくをりて三尺
又寸半つうその成くりれ大刃とては女四尺一
とら大巾くらの矢町一らたり小柄ひやう志ま
とりのちのまならとて係成の大ぬ成ひやとさん
とそうりしきけるれと成をまてとらたらう
成ふちせいのやうやつふたやうとまてれと
しけれを判友とてやうれふりのまうしやさん
これ成じとのとてやおもておとせぬらうとてそ
とくひたるれやとの大将のまふなりなりひや
うをみくらりのけやとてとらひめひまにあらん

さんよいのふよくさやうのびりや又まらぬとこ
まよりり中一も判友なりかともつ包てふとれあ
成のあちうのさとう三尺ひやう志成されぬとく
ろりおとりのうらひとてまうあかちるおれぬ
てもんくんの成あよびとせぬさうの成とらあひ
れひあもをうらうつとていぶされてはさうの成
まよとらやあけぬとぬのまうもまきくわり成と
て生年一十八さいおちりりるのもおとらのけうま
まに三まいつふとのとく一めをたくとく大長
刀のゆやもろ一母もとらひなりとてまらかひ
ととらんとすうあや三糸ひやう志のれとく三糸
ひやう志たぐぬよとひつとてあやうとらひとて

けりまきのひまわしにせむとひねりまてひねり
しうふあひたれのやぬ日らしてひかききたと
られーやまきとまといさけて毎ふねりのふさくほ
たかへきたに首をとられねやもつこてなりけま
源井まこうのむくまりふかりはさくまうとPその
とぬりあお色ちきんの三徳れこらするり志と
三徳うへまのてほをひて見。りておもひれり
張うこせて世れ中ーあちさなくや思ふれけんを
ほをいささもーねりす毎張をさるあをーむと判
夜をぬれつるつふのふをらんのもうあへり
おさせてるもちにねりばさのふつてさとらまてつり
ましくこのひたれも今やひりぬとPは世り

思ひよく事ありを義理よつひをあやのひひあ
ねしつふのちこまて中ひらそおとの思ひよく事
のふりてをねつてまらあふーりよとくめをさる
し老母張今一養見ひもぬ事さそを最の法よ
よわさるにねりんとみまらき守りてさねらる
つひもいさうよみらるさひりささまりぬをくひ
包とあまるといあのおとさし辛一坪ハやPし
二月十八日れとるこれあくるまをけるるーやーまの
つうまをりてふかり判夜片のめけりすさげえ法
て井アんー人徳やあるらつおよとしてよてと
あてれたるひうぬられらるるーらひのふかぬらうと後と
一人たつひつこてそまらるる判夜故徳おあひ

のやうな母のりとをめしやのれやりのよこの終
つしむとみしういめれくししける事と
か母是ては大将軍さうりてはたもてよすく思ひ
てくもいせいとみんせらんうれ呵てくれとりて
いあてんともやぶらんさるもてもあゆまは
つこきうれくといのちやきもつりつあまのそお
まらつりてうはつてきまへまはようせいひあ
いとくともくやもたもつか此國のちう人けすの
冬夏すけたくのすよ一すけひのういひあ
比てをまへくともてきまへてうんせうこまあ
さんいり馬なども三た夫よ二き八やまへ終るん
とすうりよ一の終てめされたりよ一を此大

ハ九代男也のちれありのちのう一まをりてはくひ
えさけてつあ色くもひくまよとすれまかひあ
ちあひさそあてああろくもさかしくあろやを
日のいをもさよいせてくせうしくありたりひも
ふきりあよたうのねえさまをくもぬたあろく
らとそくううあたは二あとうのち回さよもあ見
つふとあもぬつくくうひかよけ馬よまをかりて
判友のああよ町て下判友つりあよ一あのため
てたああまのたま中つて人すく見あせうあ
よりいあのかんえん一町てあまをりかやあ
ああはつたあきんるりああやういんせん
えあのああもつりんてあああああああ

く見がこゝろ矢のますやてんてしよよの人よね
世はきらぬくうやいらんてんてんまや判友いり
てれはひひるを幾種やんてんてんてんてん
とてて平家いひつうのうめてみまうまじつた
てんてんてんてんてんてんてんてんてん
らねやしとのひもねもよ一のうてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてんてん
つよ位でてうみひもあててつよあ
母らひらるるのくろくもてんてんてん
えんものてんてんてんてんてんてん
乃やもれき海よりてんてんてんてん

のけりまうりつとてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてん
そみきれやはらるるてんてんてん
もろはあささりたれも馬のぬとほひのね
うらへてみまもてんてんてんてん
らんやがこりりやんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてん
めささるるてんてんてんてんてん
てんてんてんてんてんてんてんてん
けしきとてんてんてんてんてん
うらやうらららららららららららら

大がさうな國此種の日くさうあんなりんるのれま
此大の都くさうおを成採るものゆせん大がさうを
うりこ一人採やすさんすもつをししとさうらりの
ひねりれもし毛といふしとゆるぬりしとやりて
ゆとさうなりて海ふまの思太つさうのせんうくと
さりておうくやうのちとせぬらんすさう今一歳
本國をひらるゝしぬらきんたとおゆ一めされ俄も
そあふさのふ中一ひさきをふくとむ中一よきせの
一てめをえあきさんや風とや一ぬきてのふまを
ひさしとす二うと二ぬせうりりさうあう波とて
流るひさひふ志ほりたりちてひやうとりつさうの

よつとけきさううひくを種よなりつとさてのゆ
みれりぬめより上一寸けらととつてひとゆつと
ひみまれそのゆさふらへととふさひてさうを
上り風よ一も見えもみもまれてうみ趣さうそら
里さうさるる皆くれなんのあゆさのゆよ日ようし
やきてはなとさうさてゆられさるるとさくさきん
を卒家ふなしたとたつてとめえたりなるゆふ
を源氏の勝るひに張たぐさやか悲のひさうとあま
張らんすうとび海しめて舟の内らと大れ男のよ
志のしめりらひひささうさうと大長刀のさ
やもろしとあふさのうらさな世をぬれまたれと
そまふたりりさういせのと麻よ一のうらみくあゆ

ませよ世ゆらやうもあふそよくいわけの二れ
まひのれ仕まといひたれしよ一のふととれも
もつらとにりしといそんをうた今姿をたのう
とらしてけりひよひつてひやうやりのうふ男の首
のかねひをうあつといぬれてまひたふまおこ
そまらうとれ徳成の共やもし一交よとくまらひ
かりよたれ四こよまらんやうなけまし昔もさす
是とふいなむいとわ思ひらん又小母さうくく
よとらりて一人たてけりて一人なふたこりちて
一人三人くく包ありまてけん一よまよとそを
新さげの判妻是と見ゆくほくまやのほりりさる
はよあらんそのをむつふてけりたう世とのま
も承ててじうたれ國の恒人見とのやれ空も同
まぬ七打り一ふ十床のうつもの國の恒人まめた
の空床志れれく國れちう人本書のちうたあひと
も入り又ふは違てそりけりたりけるたてのうけよ
まわりの入りくろあげあもつさるたやとよひまを
てれちちちとあれとふうたれますくみとれ回とのや
のすいあるのひと里のむおといけましとつすの
かてあくちうといてまれてひまこらうまひやう
ゆげ色をやうおまらひのまものしをわしとや
てるの町すらおおりにてやうてた力とぬいさう
りりたものうけまらとまらとこれたおおありてい
てらひなふたおわりのうらうてそりぬらうと

や思ひけんふぬつてよけてゆくがあらんす
のやみまゝさうし可くてよるふみとのやのす
うふとのまゝちとほつてまゝのまれしこそ
ちりたる三夜をほつてまゝのまれしこそ
れ呵志しつとむとやのわつとふたりそ
みしたりたる見と乃やのわよらとちりひつた
れつふとのまゝちとほつとひきりてはくのせいの
中へるそふも入るととひとちとくまらてお
涙をひたり乃日さよしは思ふのまゝしひふり
しつふとのまゝちとほつとちとくまらてお
たりたるまゝ日さよしは思ふのまゝしひふり
もみららんとまやう日らとちとくまらてお
あつてせひやうとまゝちとほつとちとくまらてお
れ判友のく七共ほつとちとくまらてお
とまらて日さよしとちとくまらてお
毛をみたるのまゝちとほつとちとくまらてお
のまらて日さよしとちとくまらてお
てさんくつとちとくまらてお
志や我らたふとちとくまらてお
さんをらららとちとくまらてお
つとちとくまらてお
あつて日さよしとちとくまらてお
免のまらとちとくまらてお
子のあつとちとくまらてお

ひやうも威奴尼のく國の任人ゑつらの二ふさめりの
に成きたとて都令を勝不面ふれりてうめたく
れらると二良兵忠とゑらのめらるといふをされせらん
とありそひくを獲りよりりんばらちめりて此
よ世だうまうりしらんしんくくはあへ
うまことようりなるまりの事かをいあめうん
れみちめとそび海をれんしそまわら十六
のうこれあくとまの福いあとりし時世う
うまのいささちふあうひくししれをあは
もまうややみりうれなりよ判友やいせの三
あけらるそ許さりける判友たりさあやうりあり
つててまやまよらとくとみあはまよらりそ

本りのふくくまのくやうすをとらまめいあよせし
ひんれあとりうとりとままらうり
田内とゑりんばりうめりともいふ
あきあれし判友ありそり強りててんなんさゑ
りんやうさふいあはりやまてあが強らん
めひりひく何やもあいらくをて集連とのた
まへもあはりく強りてあてびりひんてあ
まんらんさくらんてあはのまそとひらまひら
あさしりてく十あはらうまううくまてびくあ
つしあのみまあまてく三子あはらあやうい
けいあよびうあ十あはらうまううくまてびくあ
とままらひんあはらうまううくまてびくあ

ておし人おしうりうりたれたもやうのうやう
まはら上を三子よれれつしそのやもれめしくお
いあうまげるるあものうんはさうしめさそめ
専心ありのりるりまうてあのあしとまをいせ
の三歳よあはまられれありの老を小りのおと物
かさうれまうしうれ世と志海しうさまんれま
とらんすアしとそしりるまうるしとまのりく
まられま福小九國の位人をアこれ三歳あまう
うまされ次帝あまう又百もれまをまふあり
源氏のせいよくくれ海聖の回あみらのふ三百
しとすてくせまうるるまうれくおあらんそうゆあ
きのせあひやうとぶ宗光ひやうせん又すよそうま
てまうりたりまはわこおあまのりりる大お小名を
まうりうらやしあり長やも是とみく急よあしぬれ
のりのあふひ六日れしやうあうれしとまうひあ
れ月あ十九日お位者れうんわしはらりたうも
うたひまおまをまうてうんわう十六日のねのふ
くうの位者の末三れあんでんしりああうたれこ
急出てあとりてまうりて初めさとうしとんあこ
まあれしは定めさうしやうてたのめ加し午時り
けりりあそやうてまうのあんとくをあさげあれ
しくのあんとあうとくあへて大の神の神はうて
びりしそこあられりるあもあんとくしうあう
ししらすせめあれりしあし世大神まうしとあんの

あつみだにそとより廻らぬ二ぢん舟のとも包よ
らるいあく乃い包と預たやとくたつる番さき終
ては一神を三おのく國はびくくまはるやの天の
神あれなり一神を信の國なふしよいしく建ゆふ
すみより一の天の神とまやとよあのからきりとお
ほしりのしとすれましと今又てうのをんてさささ
里そもさせ終ふてかまややとさしとらとては事や
とまんくまんやりらりやとさうろむの事
さる程も平家を九國代内アし入られささやふの
やままもととひむされなとふたふしひはままり
きとつらちやもひらゆられけくいまさきんや
さしとひのりかちまよひのりひりり同しとては

口も一ありふたんのううとてやあもせとまや
くる源氏代舟を三子よそと平家の舟をよま
けん一のせいやつさおれとま家の勝し打ちそ
ゆるひけの舟の中まをさうせんをありとらや
あ福一九帝判友とまうればおまのまてしやふ
屋う思うそのりもと一てまからせんしすてふ
ならとのおつつふけくとましとてぬのあをた
うあくひとぬまうつふまふあくお判友とら
らはしやスと一いとさせんしすもありとら
のちりり判友と一のちや今度のいとまのせん
らん派もさうしひせの中らるしひと人とせと
判らんれひひりるを義經の月くやううりつ

しうちんらんよりらけしきまを公や悉く大御軍の
てしうゆつこくくもんをまんじりくくくくく
そ大御くんよらいつの母をいくらの母をわの成承
其力りれもたくととのけつとむすし事すうやそ
のけひりくらの原いくらのせんらんをたままう
まこ母てせんせいのあのとこのまやうひのしうま
をむりくしやいぬやくともんをましにくもあ
をぬすすうらりくをむが一のあのをそくすあり
けらややのなふのらけくくくくくくくくくく
くしりのお家時をいまくくくくくくくくくく
くべしうもたぬまのくくくくくくくくくく
またまさぶくし望てみえられおれといじり三帝を
守さとう三帝のやうをくくくくくくくくくく
下のつしどのくくくくくくくくくくくくく
けちあをのらしらよめさうくくくくくくくく
そ子を三人とらりけりよまきりて判及とめおの
あなふすくおおくくくくくくくくくくくく
まを三うりれすけりくくくくくくくくくく
まのらりまをくくくくくくくくくくくくく
つしふいあをくくくくくくくくくくくく
すれうのをくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
もとやあもくれりん判及をくくくくくくく
もすくじりくくくくくくくくくくくくく

乃二麻ひやう湯盛決り申のりるち申もんとの
やうしらも馬の上もてしうくりをきくいとと
おひしらふやいけりてうまんはるいづまなく
との本よのありさうんすやうよふりんしと
らめ何程の事りのいぢさういおらとて湯よはあ
ゆいんそと申りうつさの悪七ひやう色り
けりや九尾をえらるふ男れせのちりさうんさ
ひのもの二りううもれてしうよとれんなる
そむしうけくともと男しうけらるる申のり
つあひのうんでうこりしあめしとそりり
本一紙言ひぬいとのいあよありはくきよあ
あうひせしうさうくみとてうんさしと

あよりけりうらう心のつしとていぢらんとみし
うくあられまや川とつててさてすて休し
ちややうされあらとさるうとあものみんゆ免
せとてのいまけるさきのうもくねんれひう
まおひおらうらあひとてあよしこりあ
だのぬはとさきうのうらまき日ひまをよぬそ
ひのりしとさるああうらまのさふらひせおひ
とさのひらととさよあとのうらまお事よ
よのらたうらうかやき色りうてあまんと
まのらたうらうあうあうれまやあまんと
あやうらあうれととあはぬのゆらし
もねさうらうとよらすまはさううら丹と三て

おつりさんちりせんらんをふりたひやうとうと
ひくとんぬみ面よそうまをむくふにらんをんつ
さう三百よそうまをくはくさたりこらんを平家
さんさう二百よそうまをりつふ中一うもせん
らんよゆりさひをうとうとひくとんぬみさう
一うはようせひをうするまをとおとらぬつと
その五百よんとまをうてまおたてさうはひ
はめさんくはいりまは源氏の長たてもとぬら
まをらひもうけすいとんぬみさうも源氏ぬな
くはまをうてせんせさうさういさうまをたて
さうりうくまをたてくはまをいさうのらぬとせ
めはひ思ひうてさうらひの時をけくはうれと
りんをのびくまをせんぬあてさうりまのそ
れゆりまを中一まをさうりまは小太麻呂
一まをまをまをらすくのまをさうは
はよ一にらやうのうらまをのふまをそのま
とくめすまをひまをけくひれひとん
まをりまをさうのまをひとんぬみさう
はりてかまら一まをけくひらひとんぬみ
は三らやうまをまをいひとんぬみさう
のうりまをまをさうのまをさうはくたや
まをさうまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまを
まをまをまをまをまをまをまをまを

あのやりのアしめてんやのまんとしたはけりて
みんもんとて我ていつたふりてかく是れのもよ
もくぬうへやけりともまや一や一やくとありなり
りわさく一乃をとりてはるもまんと入いんや
てあつこのすくろけりしきうは十又うくれ本一
志とあつこめと一乃ゆこおとてけりひよひりて
ひやうとしおらとる回らやう余とつといひたり
て新中一細きのおめんにすくかくあらうとけり
ふぬのふ回えのうらふとけり一ろくひぬえれ
てまへきうのきぬまをまろひり
ぢんていといはけりめをりけ免れしりの事
ちねん一わものみんゆき結そいひは一ちりて

けりたりけりちらやま一因さ志まんたふよ
し一源氏まいあさうれをえめしれきのう
さしあをみんとわたりひのんふらまちふし
まししてんりり見しこのあつこあつ志し
ますそつめらりすま志うとさ志あ志うしよさ
て源氏のせひまそくまけりるお母いぬも新中
納言とねといくれまふれくろまける物とこ
らましつてまんとりひそけさあくお白くも一ひ
あくりよみしけるもまてせがらまやり
なる白く一なままひあつるまひあつるけん
志のまよさつあれとのけく種ふみそて入そら
るそのらとけりまんとつしそものともけりおハ

いふてし源氏やうれとそあつてくまらりのけいこうに
此を力ふししらん命まらんとらふり志そのやも
悉よひりひて手とひえしうらなひてれたらとぬ
くすい志ゆらんらとをぬふうこおつてせられふ
こぬせられおつてこのぬ事りも志くを源平の
くおのあつうひきふとりふりやそみきし新中
細言御所の御母より言り語りみくらうてこの世
海へさせまつりしをそのひまや志ゆひたれを
女もたらひいくさまつりおとくひゆつてしつそ
わうそつらうらんらんをせられとくめあら
しふあつてゆくとほらそをうらんせら母とらうり
らぬ結つてし女もたらひにちつてうりぬら世お何のゆ
たぬゆまうやとそおめれりれと見えゆひたり二位
ぬもまをんはまりをゆつてこのてまをわの御う
さてはゆりあのをさぬもゆりまらまのすそたあう
とさきせんでいそつてふまゆりゆひまを二とら
ゆいゆゆまは是や故のせまてもたつてなうてし
とて志ん志欲を身だおとこみありのんをゆつて
ゆりゆり今そ最のゆともは集れりりそのゆりゆ
みれゆめを見えりてそのひまをせんと思ひした
もん人もそつうまありのゆあしてそをゆたむ
しうゆられたれせんていそまらうていふな
せしすのゆらゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
なうゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

又うぬのみ種なりあまのつらなるそのゆゑを
おぼせのりはしむしにいまも残せらば終らる
しはせし物うきうのひまをさやうむし西平れ志
やうとくあつせのふかしてうえすそひへた
ふひげさうちふくれやび志あうれまの風流れ
湯をひくささうひまひあさひながるれやさんた
じのちうえがとひの志まかくもまよくたひを志
川めまはらん頭きらやうせつやになつあさんとし
ぬらうこときこまきうまふすきいおなふもみ
たせつりてうもり上のつうさうでうらまらま
ふいてつれうととささうせれまふ大物んひりた
つれうとくうとまやこたひさうせれまの肉帯を
とるのりんさまよくろうよまきうさくさひひひ今
や舟のうらなまこの下おは命とけりはうけふその
くれなるひんたひのあまのひんたひも
ひんたひ一うくつはとまのり
女ねんもう思をつうせのひたうけりさとわさおへ
の源みひんたひせうけりとも老まさと残おは
下流くしうふうらゆひひひあをなゆ女帯うら
のちうくさうとれでひんたひまうけりうあれあさ
ちうとれと女院まわさう勢れまうまひたひ
Pされもねも残されとひりてちりそまぬひんたひ
しかまうぬおらうあうたりたれしうあひさうひ
川まうまあふ小粒一うさうひんたひ

そのきらうとうの中にもうもどくらぬ
ちのら一人のりりれらつひたるをれと
れらひはすらやうの鬼もとばすまを
三人もちとらんすふはとくみまら
とてうら物紙をらやよれさあさ
やぬるりもあひたりのやぬを
やのりりれとてゆきたみすく
よしとさあをもしきてう見え
のたぬとちゆりたよ二ともし
らしてさく二とめと一めと
ううしれれまらして乃山ち
六と一もやう見えるを飛へ
もとらりもさうつりれとて
りて今さみるさ事しをみか
うくをつりふとのつてしと
うももさとうらひ二とやう
うさのてさてはてととくみ
りの中細さのさやうひはよ
も一とよをそ志門見たる
平家の一とつげとらこの
むな一とあもなとふひくれ
ともなくゆられゆくあつた
てられしを田川よあつた
ひのうしきの子よれなも
もうさくれなひもそふ

乃もし此のふふ太志やありおのりらととふハ
ハのを祢ハの若もそひしひあれと世なりよをよ
あびしそと落しくの本物ひらまゐるあを世月
ひつきのよと一幸しくよ人のむ親のまぢく
そのき子とや一見子の海行くそのと物やとや
びうんかんそんがくおあくすうと急たんとや
まみこと是とあれかくち志やとほろがさんた
りおハのあすいひをうくるをううとやゆのさ
まみことこのほふいあひれいなるおめとす志ん
よ預志やうそりきてゆめのうふたせられたり
三つしこいけハのぬねむらさけふうめろ太志
や志とのまんとやうくまてさげとのにて悪い世
れをとれえんとそふ汚るる汚るまよとめきて太志
やとれたくふくうさりあふハこれのカーおれ
一清ま速さうりりあまてまてみく人し一乃
れさありとらとてませう太祢まきうせかへし是を
我た2アハのうくまてれくしうく汚るまなりと
てをば清中一な城らせのひたりまほささしや乃
物の中一はうくし福をうれあまくろくもれつ
おの海廻てあふりあねしあふのひくくものけし
とそつあられけら天うんあふとさらせ清し何三
志のれ祢ふゆつり汚るれうれ一なりオ十代の汚
門しゆ志ん天宮れれとれまい井よとをれまうせ
汚くさうれけれとをけくまあうたあゆののけ

もつげとるのひりうさう成さけ子にけひあのみんふ
として成るるをまらせたうひゆ力やあつたは思
登りして所許ありくれさせびらうますやりてこ
の志あみ成せりやうらよふめをりたり清く
と井を志あさ島と有りてあふひてくひめり
のさめまの國ふゆくまのふ志うとこの大の採
尾ありてんら大貴れゆふ志ゆてう元年ふ志ん
だんまると志やせんたうまやうとすその我物ま
たりてあめは成ふとぬすみふとせんらうけり
うらなを成らうやれとあすをふうらうと成さんと
志もれし我物んいりけりうとて成て成やうら
おおさめな成とそ成れ上はよまをくううゆくと

く成じうと成ふ今を平家と成て部とつくと二位
及ゆふと成て成ふと成り成ゆひと成やうと成
やもりて成るうと成るうと成るうと成るうと成るう
およまの成く二とひみしと成り成るうと成るうと
成れ二と成も部をりうと成るふに成るうと成るうと
わらうと成成り成るうと成るうと成るうと成るうと
しと成と平家成るうと成の志ふと成るうと成るうと
成らうと成成り成るうと成るうと成るうと成るうと
らと成成り成るうと成るうと成るうと成るうと成るう
なと成成り成るうと成るうと成るうと成るうと成るう
事と成成り成るうと成るうと成るうと成るうと成るう
ちと成成り成るうと成るうと成るうと成るうと成るう

うまむつとぬふこめふり中一ぬらぬさゆちやふと
とめうあうまなりおれしこまもおれさよちのり
またりまおれいもちとまふおむつりまのふとれふ
そとろし系中一すうひよらんまわしりていふら
あつた上下私人とものふらつりまと東されぬの
口まふふと月くけしとまてくぬんたなるそとめ
ららむ人らうむりみるもしとえんさんぬら治取
貴和のささん色ふまひよんれおもみれつふぬ
思ひとふれありとあふりまたり佛のゆらふお
らてそりてんけくそてまをうそたふまふりひふ
そとめめの判友威國とらつらつと百六十三人
しとろさひこくまてませくらのまんまにとめけ
おしくわこまたり六条とまをわつこまをかくら
あんよとよひく判とんのとめくまよ六てうかり
川廻人を家志のあのかしとまてりことり木高親
種いせれ三系をそそくの係三係八長湯なとそひ
けり物まてせたりれとも清けしとたふととま
あをねりすねよへれととまやううくととく川
ろあゆりすまてとまもまてつたなうねとた海ひとの
まらまや一のひちるおりんのりとも清そたらり那く
ゆ一のひたりたれとむかいぬしやうとの神取の
ちうけ系らせゆひちるまのやうととまをそめ
まら下あまれまんとれから福とまらるもけり
まらあらししあの清そてまうらうけ系らせひ

いふとくしるしを奉天にすう太神の下の志戸とこ
らぬさのきりて天下にしくせと感ととあり
さうりふ八百方の神さうら志戸にぶりあつまる
てのくさうとせさせりふてんせう太神あまきよや
りてさうきほりしつとら坂あつてはらんさうれ
りてふ八百方の神さうらおもてさうらみしられ
も神ありさうらひてあれおもてさうらややねさま
ひさりの神ありはりてさうらひてあのと記さうりま
けいまれれうれやささうらひての神とや大らひ
らのうとさうらてつしと坂さうらとむらさうら
ほやみおたてられを日神あつてくれぬまひと
てんりのさうらとあつらひるり天にうたさうらの

いふとく我志うしとく人々をけりてさうらと
まをみるのさうら思ひあつて三乃りて思ひ
神を記さうらさうら神あつて三乃りて思ひ
とさうら一つとさうらのさうらとさうらとさうら
乃家あまきよら一つとさうらのさうらとさうらと
れ神ありとさうらとさうらとさうらとさうらと
いふと太神の神さうらとさうらとさうらとさうら
神ありとさうらとさうらとさうらとさうらと
ししてんさうらとさうらとさうらとさうらと
中いふとさうらとさうらとさうらとさうらと
ひや六百六十年の故さうらとさうらとさうらと
三年九月廿三日乃神さうらとさうらとさうらと

またつれ中一れ悉くひやう忌りらんまらあれと
おべしととららののつらせたまふらんついでん
もちのうらとちりを呵のくまんとくさのくまやと
のつうふくせとちりてみまうせのくま女を極まれ
まーなれとちりゆいなるーとくまよまくとらん
もまやうひあつすしてなりーあまのくまか人
もたー園白ぬくしーくまか人かときまの
せたらひひりふちんまやうらんついでんとらひ
ついでせのくまぬりさくくまぬらふとひまうけ
らせぬひりくまうらうくまうくまうてあま
目のふれしとつくとくまのくまーとくまはなはぬ
わらぬを比よつあぬく百五拾うあぬの治ちりのひの
らんらせぬつすをらんまやうくまのくまて
をらつて世おらませとまのひらとあれしたち
まらひたりのぬ神すとひそつとせ治ひひり
をぬくまやとのまのまの後にまのけくまの
らぬま地まをぬてま上乃治らぬま大くやう
らまんののひことくまのぬまのまのひら
をぬくまのうまをたくおけーまのま今ま世れま
おまりておいまをくまのひらつらせぬまま
まのまのひらぬまのまのまのまのまのま
つかまの山ふくまのひらぬまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま
まのまのまのまのまのまのまのまのまのま

中一お町を母にわひて此終ひたる終ひくす人
さ終ひをまじふまじと一町の義理ふとられしよ
そ中一ののあまのふくむるさるるに人をもお海
をうんと我力もたせけられまふとの多くと中一
将うらあんとしてすれけるに判友をぶ海にこそ
かさけうのくゆい人女もうなとのうらたるるけ
くもい候とまじけうに取こい今をなふりこそく
しめい候とせめさるるのまじけいすうらうら
まじとまじ一人思じう候ふまひてあてりありて
さ終ひれ事をもおがさるれうへおすとも中一
なれと大細言目此をびと免やも涙を女はえさ終
に中一の思ひしよに中一のなまじくの人よ思

そアしとをうりても思ひうらさるるに中一の終
ひりの中一お町のむらまをうらあくのひめきとの
いし十七ようりたうひりささ思ひれされは
程是とてゆらしし終ひすせんゆくの終ひとめ終
三ころさうまけるともこれひと判友よ思さるれ
けり判くらんをりこれうらあくの右君のむと
めもさるるをさるるに中一のあまのあまのむと
らのとせはせまり終ひの時女もう思ひたんのぬ
えの事と終ひこれうらたれをうらたれ
おいよあまのむとまじとてあてりとも中一の
あまのむとまじとてうらたれり大細言のめあま
を候ふすまじとてあまのむとまじとてあまの

のちくさやうや一のうしんはやうさうれあ
れよや左換乃も一さきくまはあやねの
かきしんそんすのり

女院法が流れる

さるほとふりんまいりんのんを東山を田北
なり西子さうりつうせだうひかりらうふあん
京さやうらんこーなる法師のもうりりさすみ
うーして年るよもれし海りやをさあひく
そのあつ志まきつとせんとれたとねちあうし
風へ海流をうとみとさうりやり荒をりあく
をたあうしこのび人もむく母を救なしく
入やもたうのりてあつととものほるにたまのりて

アとわうまう一にらやうふまともれたつ
くうさきつよ一とんかありとある人よをみ
まのまりしてう幾つとあさうかならとらうい
ちりつうせのひたん法むのうらとととく
あもれなりみりの程つふつうせられあに
女をさうも毛よちみふたりくすなり汚ぬ
よのくうすあくれおのこも一馬のそともな
流すもつうのりさうまうとさうりつう
上丹の内法すたねもつとを流らひ一をそ
一めされたるおさうそあのかをけとも
うらとつれりくはうとあつとあつと
さるのりさかんとさうひそな天上の又と

つゆしし人るしとありたるゆとみきし
元暦二日正月一日女降沛く一抄あるを世のひり
沛くい乃師よを長樂するれ初尚のせう上人まんせ
いとまきしし沛くいれ沛婦せよそきんて六乃沛
おとまり上人もとのてなふと申ししをよと出
されねともあまきとウがす一抄一あてくす見うあ
の禮とましがられたるまてを免れたり
沛くいれもぬうつりのもいまこつみきぬゆす
西國より沛くい見うもそそるくもたさきぬ
ひたりおれしつりばうん世までもはかとしおた
しやうと思ふまされ沛くい乃母せよまりぬ人
ま揃のりふし人沛くいぬのたぬまりとぬゆし

ゆつていふぬいちやうらくちりしやうめん
うけられたるそぬれ女院すよとちりぬま
せふまひ十六日とてころひれくす井すそななるた
まふくんしうのひくけうおゆををゆてわし乃ふ
そりさまわりしとてすくぬきりぬとぬもり
すしせのぬのひは廿二日とて王子沛たんとやう福
かくらまうとぬとすく世のひりし女ふし
かんぬりのうあつ世たまひくゆんまいせん沛也
そりひる天下れ國母とてありまゆる入をね國
のゆひとめなれおもく一高家もたぬのめ
廿二日今年二十九日とてなりせのひりたるう里の

世にふかき海をのりふと老いふとめらふもあは
ぬむらしてき海をり包てくらとやけと思ひもの
もぬたふれおく思れき海にそあめりくくさ
せにうひたるは井し森をみれきふもやたら
はかましりやびりしえつとのとて志を死聖
をくそまりおける日はみかまを人れといふも
たせせんのもをぬて七世のまこよあひらんとの
くやせぬてあもれりり三徳らう志やう志を
むくのまやうのまよれれれくとくそふふ宗大細き
くおつれのまやうれれむむとめせんていのはめれ
とふ大細言のすけふのせし西國よりたあふまとの
のぬよとくつれてふるふ都りくをこのやりね

てやめねのたまの三徳やとく志のくして目撃と
むふりうむりくくる三徳らう志やうの病の余ま
紫の末はそくまはくいまふふそやうぬりしや
しつとつと一瘦うしらぬすられたとみもしえ
そまもしやととももれたれともさるつふたにうま
がうらあれもりくくあつ志くくう後ひたり
は海やとれくわのたまられのふ事
卒家ほあひくぼを國にもしつうお人のりうふお
むつうひなく都を抄さまうまうたれもあはれ判
後程の人ううたけき道念れ源二ぬもゆるりう志
うううのふれぬうまやうあふふく判友の母ま
あうまやなとすあひりり源二ぬふりしとまき

てゝもしつうおね物のおなけりてうらふこととせめて
らせしじう平氣をたやましくけりひねま九麻一人
してきつりてのせよも志のむつたひやく人共のよ
おとありて我まうけりてうらふこととせめて
うらむこととせまて大綱言のむこまけりてうらむ
られをよおねのむむむも志のむつたひやく人共のよ
つうま海今夜とてさくらまうらんのもうまひを
てんをさし肉くむようう守守りてむつたひやく七
日九夜たつたの判友義種ひねむこのうらとせ
たりてうらむこととせまてうらむこととせめて
いとの人して判とらんのもうらむこととせめて
就やめ目すてうらむこととせまてうらむこととせ
俄それうらむこととせまてうらむこととせめて

いとの人して判とらんのもうらむこととせめて
就やめ目すてうらむこととせまてうらむこととせ
ゆきむけりてうらむこととせまてうらむこととせ
やうんゆもくあなれとらむこととせまてうらむ
うきとつた一夜見ゆこくややありたれをむんく
とせむけりてうらむこととせまてうらむこととせ
あてれ小太麻重系のりてうらむこととせまて
志やうりけりてうらむこととせまてうらむことと
さう二人をつたたりける二人の女さうつたひやく
とておねむむつたひやくにけりてうらむこととせ
とておねむむつたひやくにけりてうらむこととせ
はりの人もあし人の車うらむこととせまてうらむ
おねむむつたひやくにけりてうらむこととせま

降りて世にうきをけりていふやもむとの人
しつうまゆひちぬまじりけひたりおがいの
みいふかてくもゆあのみしよまひなるを是
見たり人かあの子の母をきとひとてなんさん
とてとまぬさんてたひらのおまじりうのやも
やりてうらやしてなやみうのうたうんけうお
さんふらうくさささあひとまてあまはを
しらしうひこ思よけらんをよめおとなうりの
つもさししならてけうすおとひひしぬひん
けふあのお清を天下ふひやうくあらん時大將
軍まで是をぬくしやうくんこせしすれしやうて
なげかくしやうといもんといひしなのためは

らす候てすくふのさりの時まてもなりとらひおと
しとあひちりの七日とつひしよはるよころの
おさつりそとよををみるさひよをまられぬそ
よとて候くしひきひけすもたゆあのみしよ
けしとせりんのうきとたのまらるもやうく
書もれしうれしとてうりけしとぬくもやうと
くうぬきとのけししわりきとらく乃しやうあ
の種よとをけしこのてゆれやうぬらうまなうれ
けりぬさんりうとてふらひしうまよ思ゆる
しかも一のあらんすうくう包りてふのを糸に
あしとのけひぬれをけとらうたうす二人の女
まうもさしてたもあかぬきあうなもせのまみつこ

死をりて車(一)の死を悔いと此(一)の君の(一)の
死にけりく(一)を(一)り(一)の(一)ひて(一)は(一)の(一)思(一)ひ(一)の(一)き(一)し
ま(一)れ(一)り(一)す(一)が(一)し(一)と(一)し(一)を(一)た(一)り(一)の(一)ま(一)け(一)る(一)く(一)の(一)ゆ(一)い
あ(一)ん(一)の(一)姻(一)の(一)人(一)ら(一)ふ(一)の(一)れ(一)と(一)り(一)た(一)へ(一)も(一)ほ(一)り(一)し(一)ら(一)ま
つ(一)の(一)を(一)我(一)あ(一)り(一)し(一)も(一)は(一)て(一)の(一)よ(一)と(一)さ(一)い(一)ま(一)し(一)お(一)り(一)少(一)り
死(一)て(一)必(一)死(一)を(一)結(一)ぶ(一)る(一)す(一)り(一)の(一)お(一)ひ(一)た(一)り(一)た(一)ま(一)ふ(一)ま(一)く
お(一)ひ(一)ま(一)海(一)を(一)よ(一)と(一)く(一)れ(一)て(一)お(一)け(一)り(一)ま(一)り(一)た(一)れ(一)を(一)た(一)の(一)め
な(一)く(一)ま(一)じ(一)う(一)の(一)ひ(一)し(一)て(一)海(一)濱(一)の(一)た(一)ひ(一)れ(一)を(一)ら(一)ま(一)と(一)し(一)て
井(一)よ(一)り(一)の(一)死(一)も(一)な(一)れ(一)ぬ(一)人(一)れ(一)の(一)ま(一)さ(一)や(一)ふ
ま(一)て(一)四(一)十(一)よ(一)回(一)も(一)な(一)ら(一)し(一)す(一)る(一)ま(一)ふ(一)そ(一)何(一)れ(一)の(一)め(一)
み(一)さ(一)ら(一)ひ(一)り(一)の(一)同(一)十(一)五(一)日(一)し(一)こ(一)と(一)判(一)友(一)よ(一)り(一)の(一)
を(一)ま(一)て(一)の(一)れ(一)と(一)り(一)ま(一)み(一)も(一)し(一)何(一)と(一)も(一)あ(一)ら(一)ず(一)人(一)と(一)し(一)

供(一)や(一)ら(一)ん(一)に(一)申(一)あ(一)れ(一)と(一)判(一)友(一)た(一)う(一)志(一)し(一)あ(一)つ(一)さ(一)が(一)り(一)の(一)お
お(一)き(一)な(一)さ(一)と(一)の(一)お(一)も(一)ひ(一)を(一)し(一)て(一)鐘(一)念(一)ま(一)し(一)こ(一)と(一)の(一)お
ま(一)り(一)す(一)も(一)り(一)し(一)る(一)を(一)う(一)ま(一)と(一)り(一)る(一)と(一)の(一)ま(一)ん(一)を
う(一)し(一)て(一)死(一)を(一)し(一)る(一)を(一)う(一)ま(一)と(一)り(一)る(一)も(一)う(一)し(一)は(一)ひ(一)を(一)れ
ま(一)り(一)や(一)お(一)も(一)い(一)ま(一)し(一)て(一)死(一)の(一)う(一)ら(一)ま(一)れ(一)を(一)り(一)の(一)死(一)や(一)二
人(一)の(一)女(一)と(一)し(一)ぬ(一)ま(一)る(一)り(一)し(一)て(一)死(一)女(一)と(一)し(一)お(一)中(一)
け(一)る(一)ま(一)り(一)の(一)死(一)り(一)ま(一)す(一)る(一)ふ(一)ら(一)く(一)る(一)る(一)ゆ(一)く(一)ま(一)ま
の(一)志(一)を(一)死(一)と(一)判(一)友(一)の(一)と(一)も(一)り(一)ら(一)ま(一)す(一)人(一)や(一)死(一)の
ま(一)み(一)も(一)し(一)あ(一)ら(一)ま(一)ら(一)り(一)の(一)り(一)と(一)お(一)入(一)ま(一)り(一)と(一)つ(一)か
ま(一)て(一)人(一)の(一)車(一)と(一)を(一)し(一)ぬ(一)く(一)と(一)中(一)を(一)し(一)り(一)ま(一)す(一)や
む(一)も(一)て(一)ぬ(一)ま(一)し(一)て(一)死(一)を(一)る(一)ま(一)り(一)ま(一)み(一)と(一)お(一)り(一)お(一)り(一)の
ま(一)り(一)て(一)死(一)ひ(一)う(一)し(一)お(一)人(一)れ(一)ま(一)り(一)て(一)ま(一)り(一)お(一)り(一)の(一)ま(一)

せうくと尸にしまり悲又ふれぬの意うよば海に
也のく海に趣来らんとすらうも力給ひくるさい
とわく交わりのさきくくまたの世業して六宗と東
をや里てゆくりのけくよを致まをやうとくめして志
えりし志きそを致暮つてえお海へまうひと二人
の女赤目しはまらうく致ししを思ひまうとく事
なれたうしあたりてやうのしをてし志とわきて
そとめさけりる致見えたさおわふまのておかゆと
乃やつらうおわさうせ給ふそとのたまへんや只今
もお入せ給りんすらうしあうくまらあうせの人
とてしるさうし力よおつこさおあ志を海うしこ事
あらうとくちりたわみてうろくたらまけつあ
ねしうの君太刀力のけおとそれのひてめれしり
ゆしうろよりがさうへてそなふゆふしあうと
うしとめと三つし世をれやさうしあうさうか何し
と思ひてめれとわぬしうろにいたさつうておし
志くるとひきもれらたてまうりてあし力明くな
ぬまじりふそのゆきひとそとらまてけりしうしや
ハきひもそるりれまお首級を判らんお見せんと
てもたきく初しむくあうしむりあうりうおを
てとえらう二人れ女もうりらとくしあて判友の
おしきさうしうあうくさやうりくまのあえめは
とひとゆくぼり世をやふらひあうきんと尸をれ
し判友らうあおなうりあのみ人よをともやうしり

既ししとゆるさるれけり女にうけとひと母やこ
ろに入てつづれとみまもるは又六日さうつ
ら川ふ女帯二人見えとあけくさうあがりり一人を
物さばるそのれくひと母とあま入てさのみさ
まあれさめのせなりたりめれらう方となると
つうふせんといさやくれ女しうりおばるしきと
ゆゑさうあまれなれ

お母いこのうらうさうれおましくおがらと
またさけくる

元暦二年二月七日九条大寺判友とあかいとの
親よりなりてくまんとうあおのうさうれりり
まんくまんおさけり人まきまうもやうく

よ月くさめまおの海い波まんくまんまおまう今
既してたすけのくくつとつと判友の御返す
まを今度のいささのくまんまやうさよの
余返をりてたすけ糸らせしやとさうあまう
さ海もさうのつとへおつと糸らせゆまんす
ひとしされおれしお母いあろらろけとし海
えうのさむならちし海なりを親おかりひなふい
のりたふあそとの海ひりうそあさまう六國く
おまらささしとさうりめふ種小海まう六國の
のうのみまもさうりえうしさしはさ海れうと義
れさうなりたれとおかい波うと馬まらとお海
をりてそのおあまうれたとたさおとあわこ

まうとては判友けりのまへよりこまへくらまふと
やうとやうのれらすいひうーとりてんかんのじ
やうのちやうとめぬんじうーつらとたまふと
やまきけりうのやまはむかいはのゆーとまよれ
せまひ下りし志のふ種よすうのれ國うさし海り
けううもまりうーりむかへつらり
しをちらりたしとありひとすうのあが
なううまー海りかざしゆーのね
ありんのこも

我なれむ思ひうーもゆらやーのねの
びなーえさうらうふさうらうと
目うすゆわしうーぬらうらあして鑑念うーくそ

さりうーの判友三回比しう人ときたなて
つがうう包あむ肉取中しされもれし源二位没り
らほうとつて九麻のさんやうりさくを入
なんすうそさうひためをへしとのまふもりの
とれぬてもをのらりてもよほくはるすうさひあ
まううまひひさんまやうの大ふ小名とまをく
とまをうんしてまのくまゆーなかーゆーのらと
ひさしおまふすうらとまかーゆーゆーのらと
うーゆーひひさましせひひてち後とのう
まううあうたてまうり判友とまをれまう
まううあうたてまうり判友とまをれまう
まううあうたてまうり判友とまをれまう

けりる所よりほがとるれてくさふのせいのまを
二位ぬひたれ友申ありつるをとりてのつひなる
とれ物まゝと平家小いとお思ひまゝとを故ぞこ
りけりてん小つりまたまけんとつひとこ入
るお國の法ゆる志ゆりてやつてのよらまの
首とつみゆつてお扱つて林より年々秋をくわひ
つててともゆつれえれをてつてさとなつてさあひぬ
心よそわんぞんとのてこくくほおたうとま
里併ぬやうおらんおへつとじうあひや
さりけまといつひとくられえれそつてのそお
いやれくおあよまりては曲とすうおおありの
しこまをまらまげりつるおらつたれつてく

らうりつたるお名を平家おぼつこつ志をれお
もつるを命にすうらんとしておちらつてつていひなる
らびていとおまかりてあれはうやのつひててこ
そお海の名とれとつてまの思ひおほき人れこ
ままをてとるてと多ん只今わたりてつてこまをさ
まねてつて命のたをてつて世のふつてつてつて
のしつてつてつてつてつてあさえあををるれお
まもものくつてつてつてつてつてつてつてつて
くまのうあらひおつてつてつてつてつてつてつて
あつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて
つてつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて

かひ及れ只今まろひま汚るるもしとけをなかりや
申てさうりち涙をがささめをれ判くんを鐘念を
入られぬ事とを大いじふと思ふれをれと悔ふ
跡はあお二心なさらうとさひくらんをされ
け建をわめては世事もがらうりうれと死出
せんのたまひりりといまさいおのりとも
とにつうてまぢやうりんさうなまよしやうとそ
るそそはてまつられけうれぢやうおひしく
義理はししてあんよそとい志のしは代友の一
びととておんせんとぬすてふてうとさげら
ほくさといものちちをまよめをとんぬくひと
型うよとこなけふとてあう思ひの外！あううれ

うんのんおよてび二のうんちうと持ちて死ぬ
とこに月くしてとらとさうあうさうさうあやふ
まはしとりんせぬらんさうとあうさうさうさ
まじうぬいよしつうくまのむとあんを
ぬよさんぢやれまのぬとくさぬすつさうさ
ぬへられさるるさうとぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
つうよしうぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
そあのとぬをんうんとまじうまら守ぬぬぬぬ
うぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
たえぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
うんぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
れんぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

此の三あるりきれんたつひ首よりとつれやもむ
くろと一雨やゆらんやう思ひほつよ思ひの外
みぬくよとかなんもよふそのりやれとのぬん
そひちりたれ思われ依きさいあのはりさ海と
ほらせせんよはきてもうひのはむうらつよ
くつやううううううううううううううう
ひのめらのの所のひりれそびたれくそのたのた
きとてあふとのやきさよまじわらぬくさうひなり
今年そ二十九おなうせつふるりこるれ事と
ほくほくあてゆらきさくれくく一様れゆり
のしとたさひみばなせ十八十まてたもたせ
をそれも種やとある種よとやとらんいません

げんりうふ里海ぬんれつりすいもんや海んぬ
ふらやうりうのひよとつて海やを海口のぬく
まいまふてさうとやうのううぬりつころせ
ゆひぬらうんと海急いづとのに海海流りす今又
ふりる海ゆみあもせのふもせんこのたゆく
と心るれくせも人もさうう見えせぬかぬ
そこの志こもあまのりとい生も海とま
て死のときりされもちんれ志くさうのさありと
ままらあもほぬよまこさんれほくさうのまれ
うしの海ていれらやうせふとぬりひちもむ
らふと連うのこりよららふま天人が海みすい
目よあむさやうみとてらんさてさうけりし

のちんししきうさのゆくじ志也
らんしんじ志んばうゆらうやう
ともおうれてらん何事もつひとお思ふまはし
つうなれしきしとやういふまはしんをくや
て我らよりしせうきんまふのりなり我らちや
ぢくくおあうのる生志しれんしていまは
ゆいさ乃あをちうさう今夜れうの山お入て以
証ひなきくせうおんさるを証あらなる本
のくらおしふるらもおのめさまのすやあ
ひさるをてよねんぞくこらおのふなとせうい
つおまりときりよ念佛とてくめまお大はな
まらよまうねんをひおのやしお小じさのりちや

うの念佛救面うんとおつくあうとくう交まとの
流く首をたへてまうまのまけるるるでうらもなの
馬式せりやもなうのうらひはそたまめうろく五
けりおれも大はなうのまの思のて志のんゆい
そすそふもこのゆいもあをほをひやあすをゆ
まげらせしち志まのひちりもまうりてともたうも
皆往とそぬらうらるはやもなりとりや新中一
志志感ふ約々志このうやうひや今一秀世まの
うんとて過愈をけら下アまのゆりさうせよ
志さうふたうひとさいもんううよ一志れうの
とひさうらるるともたうをよくまぬそのそた
まのりるまはひ志こまゆ子志りんれうこのはあ

素れ悉せん乃うとひと子か母ひひと大長女れさ
いと乃うさ海やつうにとのめ久そやうのありり
さうさうみしうせのひひつれとやさんおれもれも
まんのうと乃のめ乃う手候て酒おびりひひり
やうお念仏二三千おんとかゝてさうそとうとて
ひひとねんてうとさうれふてさうりのや太良
ともひろなり色まん乃の思ばりのれもさよとひ
生年十七よそなうまひらひひ成を判要指きて部
をへびらろなもせんち志されひ志まともむとての
ととぶらうとゆととて一あれおうはさうとさとと
てくそれかりりう同ふ坊三日あひつと三束川原
よめびりひておれいぬうれくひと獲れたり大

らとつとてあくりんおりのらねん一やさうとあ
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
てつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
らとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
あつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とんよつとつとつとつとつとつとつとつとつと
と日本我物もやま何めとそおれ西國よりつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
束と束つとつとつと束國より海までそとつとつと
うとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
らりつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと



Handwritten text at the top of the page, possibly a title or header.

Main body of handwritten text in a cursive script, covering most of the page. The text is arranged in several lines and appears to be a continuous passage.

The reverse side of the page is mostly blank, showing the texture of the aged paper and some minor staining or foxing.

110X
123
9